

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370352

研究課題名(和文) ティブッルスとプロペルティウスの比較研究に基づく恋愛エレギア詩の進化の解明

研究課題名(英文) An Elucidation of the Progress of Love Elegy based upon the Comparative Study on Tibullus and Propertius

研究代表者

日向 太郎(園田太郎)(HYUGA, TARO)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：40572904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：プロペルティウスとティブッルスは、古代ローマの共和制末期に花開いた恋愛エレギア文学を代表する詩人である。両者の活動していた時代は重なっており、それぞれの作品のあいだには、主題や文学的類型の点で、共通性が数多く認められる。本研究は、このような共通性を示す箇所特に留意しつつ、相互的影響の解明を試みている。作品内部に認められる同時代の出来事への言及から、プロペルティウスの詩集第1巻はティブッルスの詩集第1巻よりも先行し、ティブッルスの第1巻はプロペルティウスの第2巻に先行していたと確実に推定し得る。この推定に基づき、両者のあいだに存在し得たと思われる競合意識を探求している。

研究成果の概要(英文)：Propertius and Tibullus were foremost poets of love elegy, a literary genre that blossomed at the end of the Republican period of Ancient Rome. As they flourished contemporaneously, we can find a large number of common factors between them with regard to subjects and conventions. The present study attempts to elucidate the mutual influences between the two poets paying special attention to the passages which exhibit these common factors. With the aid of some references to contemporary events in their works, it can be safely inferred that Propertius Book I was chronologically prior to Tibullus Book I and that Tibullus I preceded Propertius II. On the basis of this inference the present study pursues the workings of the presumable rivalry between the two poets.

研究分野：人文学

キーワード：西洋古典学 プロペルティウス ティブッルス

## 1. 研究開始当初の背景

古代ローマ共和制末期に活躍した恋愛エレゲイア詩人、プロペルティウス(紀元前50年頃~同16年頃)、ティブッルス(紀元前55年頃~同19年頃)については、ここ30年ばかりのあいだに、複数の学術的価値の高い校訂版や注釈書が刊行された。このような優れた研究成果をもとに、本文にかんして一層踏み込んだ解釈が可能になった。

具体的に挙げると、プロペルティウス研究の基盤となる本文校訂としては、P. Fedeli (1984<sup>1</sup>, 1994<sup>2</sup>)、G.P. Goold (1990)、G. Giardina (2005<sup>1</sup>, 2010<sup>2</sup>)、S. Viarre (2005)、S.J. Heyworth (2007)を数えることができる。Heyworthは、同時に自己の校訂版の姉妹編たる解説書、*Cynthia* (Oxford, 2007)を刊行している。写本伝承については、J.L. Butricaが校訂にかかわるすぐれた書物 *The Manuscripts Tradition of Propertius* (Toronto, 1984)を著した。また、H.-C. Güntherは本文への積極的な介入を提唱し、その大胆な事例を示している。注釈書についても、P. Fedeliの他、第4巻はG. Hutchinson (Cambridge, 2006)、第3巻はHeyworthとJ.H.W. Morwood (Oxford, 2011)が手掛けている。また、F. Cairns, *Sextus Propertius. The Augustan Elegist* (Cambridge, 2006)は、プロペルティウスが1世代前の恋愛エレゲイア詩人コルネリウス・ガッルスから受けた影響を検証しようと試みた。一方、プロペルティウス程ではないにせよ、やはり本文にさまざまな問題を含むティブッルス作品については、(第2巻について) P. Murgatroyd (Oxford, 1994)、(第1巻について) R. Perelli (Soveria Mannelli, 2002) (全巻について) R. Maltby (Cambridge 2002)が精緻かつ有益なる注釈書を著している。

## 2. 研究の目的

上に述べたように、恋愛エレゲイア詩を進めるための基礎部分はかなり整備された。研究代表者は、大学院時代を通じてウェルギリウス(紀元前70年~同19年)作『農耕詩』や『アエネイス』を中心として、ラテン詩の研究を進めて来た。大学院終了後は、研究領域を意識的に拡大し、ウェルギリウス『牧歌(詩選)』や恋愛エレゲイア詩人について考察結果を著して来た。2011年度~2013年度に研究代表者として行った基盤研究(C)「プロペルティウスの文学理論と創作実践の解明」(課題番号23520365)もこのような研究活動の一環である。

本研究は、こうした経験を踏まえ、ウェルギリウスより少しあとの世代であり、彼の影響下にあるプロペルティウスとティブッルスと比較し、彼らの創作方法についてより具体的な知見を得ることを目指した。とりわけ、両者のあいだに存在したと思われる文学的交流、対抗意識、つまり創作上の切磋琢磨を明らかにすることを目指した。そうすることが、エレゲイア詩という、紀元前1世紀末には花開くが、オウィディウスに受け継がれた後は衰退し、その後はどうも復活を見なかつ

た文学ジャンルの進化と滅亡の要因を解明することにもつながるのではないかという考えがあった。歴史叙事詩、英雄叙事詩も含めラテン語のエポスについては、エンニウス、ルクレティウス、カトゥッルス(いわゆるエピュリオン)、ウェルギリウス、ホラティウス(『諷刺詩』、『書簡詩』、『詩論』)、オウィディウス『変身物語』、ルカヌス、シリウス・イタリクス、スタティウス、ヴァレリウス・フラックスらの連綿と続く伝統がある。これに対するエレゲイア恋愛詩の一過性は、どのように説明すべきであるか。本研究の究極的な関心は、この点にある。

なお、本研究には、すぐれた先達がある。とりわけ、R.O.A.M. Lyne, “Propertius and Tibullus: Early Exchanges”, *Classical Quarterly* 48 (1998), 519-544は模範的な考察例であり、参考にするとところが大きい。Lyneは、プロペルティウス第1巻がティブッルス第1巻に先行し、ティブッルス第1巻はプロペルティウス第2巻に先行するという年代的順序を確立した。また、この順序に基づいてティブッルス第1巻に含まれたプロペルティウス第1巻への反応、さらにプロペルティウス第2巻に含まれたティブッルス第1巻への反応も指摘され、考察の対象となっている。

## 3. 研究の方法

本研究は、上記Lyneの(とりわけ年代順序にかんする)考察結果を踏まえつつ、両詩人の作品の精読を進めることを基本的な方法としている。その際には、「研究開始当初の背景」にも挙げた注釈書や研究書を頼りとした。

Lyneが検討の範囲としたのは、ティブッルス、プロペルティウスの初期作品の呼応関係であったが、本研究はこの範囲に留まらず、ティブッルス第2巻とプロペルティウス第3巻、プロペルティウス第4巻との関係をも視野に入れることにした。この場合、同時代に進行中だったウェルギリウスの『アエネイス』との関係も見逃せない。両者とも、『アエネイス』について強い関心を抱いていたはずであり(プロペルティウスはその衝撃を第2巻第34歌で告白している)、じじつこの建國叙事詩に触発されたと思われる歌を残しているからである。たとえば、ティブッルスについては、第2巻第5歌が、プロペルティウスについては第3巻第9歌、第11歌、第4巻の多くの歌がこれに相当する。したがって、ウェルギリウス作品も本研究の重要な軸となっている。両詩人とも恋愛詩人と称されるが、恋愛詩だけを書いていたのではない。そもそも、恋愛詩からの脱却を、彼らの作品集はすでにその内に含んでいるのである。

本研究を開始してから、1年後には、プロペルティウス研究、ひいてはラテン語韻文研究にとって、またもや記念碑的な大著が出現した。それは、Éric Coutelle, *Propertius, Élégiques, livre IV* (Bruxelles, 2015) および、Paolo Fedeli, Rosalba Dimundo, Irma Ciccarelli, *Propertius*

*Elegie libro IV* (Nordhausen, 2015) である。双方はともに、プロペルティウスの第4巻だけの注釈書でありながら、前者は総ページ数は1000を超えており、後者にいたっては二巻組で、総計1500ページを超える。Fedeliは、半世紀前の1965年に第4巻について注釈書を単著で刊行しているが、今回は共著でそれを更新する重要な業績を示したことになる。両者とも、プロペルティウスの詩文にかかわるさまざまなレヴェルの問題を取り上げ、プロペルティウスについての百科事典的な書物となっている。

こうした大著の刊行は、本質的には本研究の大いなる助けとはなかった。その反面、成果の発表という点では、進捗の速度をやや鈍らせることにもなった。その時点まで積み上げて来た考察の再検討も若干必要になった。

2014年度は、とくにティブッルス作品の読解に重点を置いた。ティブッルスには、ローマ古来の伝統や田園生活への志向が顕著であり、ウェルギリウス『牧歌』の影響が認められる。また、ティブッルス作品に(オシリスも含む)バックス崇拜への言及があることは、やはり『牧歌』第5番との接点であり、特に注目すべき点であるように思われた。プロペルティウスにも、初期の作品にはガッルスあるいはもしくはウェルギリウス『牧歌』との接点と思われる第1巻第18歌もあり、『牧歌』の再読も行った。その成果が、雑誌論文の である。年度末(2015年3月)には、イタリアのフィレンツェ、ピサ、ルッカ、ペルージャを訪れた。1994年~1996年のフィレンツェ大学留学期間に指導を受けた Antonio La Penna 教授をはじめ、同期間に知り合った友人で、現在ピサ大学の Alessandro Russo 教授らと研究上の意見交換を行った。

2015年度は、ローマ人の歴史意識や共和制についての記憶の在り方をめぐって研究を進めた。その一環として *Joseph Farrell and Damien P. Nelis (eds.), Augustan poetry and the Roman Republic* (Oxford, 2013) の書評を執筆した。これが雑誌論文の である。また、2015年5月には日本英文学会の招待を受けて、古代の修辞学文献に含まれる技法の1つ、エクフラシス *ekphrasis* について発表した(学会発表)。その内容を後日まとめたものが、雑誌論文の である。また、6月には、ウェルギリウス『農耕詩』第4巻で扱われている蜜蜂の再生法にかかわる報告を、地中海学会にて行った(学会発表)。年度の後半は研究専念期間となり、上記 Russo 教授を通じてピサ大学文学・言語学学科(Università di Pisa, Filologia, Letteratura e Linguistica)に受け入れをお願いし、2015年9月から2016年3月までピサに滞在した。ピサ大学の付属図書館やピサ高等師範学校(Scuola normale superiore)の付属図書館において、文献調査や資料収集を精力的に行った。また、Russo 教授や同じピサ大学の Andrea Taddei 教授、フィレンツェ大学の Enrico Magnelli 教授、ディ

ネ大学の Matteo Venier 教授と研究上の意見交換を重ねた。2016年3月3日には、上記学科の Russo 教授および学科長の Mauro Tulli 教授の御厚意と御協力によって、上記学科において講演会を行う機会が得られた。これは、プロペルティウス第4巻第7歌についての考察であり、2015年に刊行された新しい注釈書をも視野に入れた研究報告である。幸いにも Tulli 教授をはじめ、多くの研究者と意見交換を行うことができた。さらに、ピサ滞在中には、ティブッルス第1巻で扱われている少年マラトゥスへの愛を主題にした第4歌、第8歌、第9歌にかんして集中的に研究した。このテーマにかかわる論考を、所属学会であるフィロロギカの機関誌『フィロロギカ』に投稿すべく、準備した(雑誌論文)。

2016年度は、上述したプロペルティウス第4巻第7歌についての報告を踏まえ、研究論文を執筆し、所属する日本西洋古典学会の欧文学術雑誌 JASCA 第3号に投稿した(雑誌論文)。さらに、いわゆる *foedus amoris* (愛の盟約) や *servitium amoris* (恋の隷属) といったプロペルティウスやティブッルスの両者に共通して認められる文学的定型についての論考を著すべく、関連する詩歌についての精読を行った。その成果については、2017年度中に公表できるよう引き続き準備中である。投稿先としては、所属先である言語情報科学専攻の紀要『言語・情報・テキスト』を考えている。年度末(2017年3月)には、ピサを再び訪れ、文献調査と資料収集の他、Russo 教授や Taddei 教授と面会して研究上の意見交換し、今後の研究協力関係の可能性について打ち合わせを行った。

#### 4. 研究成果

2014年度は、ティブッルス・プロペルティウスの両詩人に多大な影響を及ぼしているウェルギリウスの『牧歌』について、論文「*Carmina descripti—ウェルギリウス『牧歌』第5歌について—*」を発表した(雑誌論文)。ここでは、ウェルギリウスが自身の分身として「書く牧歌詩人」モプスを登場させ、口承詩への憧憬を表現した作品であるという見解を述べた。

2015年度は、アウグストゥス時代の詩人たち、とりわけウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスの歴史意識を論じた15点の論文から成る論文集 *Joseph Farrell and Damien P. Nelis (eds.), Augustan poetry and the Roman Republic* (Oxford, 2013) の書評を『西洋古典学研究』に寄稿した(雑誌論文)。加えて、テオン、ヘルモゲネス、アプトニオス、ニコラス・ソピステスらの修辞学教程に含まれている *ekphrasis* の項目を検討し、ホメロス叙事詩のアキレウスの楯にかかわる描写と比較しながら、この用語が近代になって「造形芸術作品描写」を意味することになって行く経緯について論じた(雑誌論文)。

2016年度は、ティブッルス第1巻第9歌の本文の問題について論じた。この歌のなかで、

「私」は、美少年マラトゥスに恋をするが、裏切られたことを悲憤慷慨している。21-22行は、servitium amoris に基づいた感情の発露とする解釈が一般的だが、当該行はむしろ吟味を目的とした奴隷への身体的虐待を意味するものと考え、当該行の移動としかるべき修正の提案を行った(雑誌論文)。さらに、2016年3月に行ったプロペルティウス第4巻第7歌についての研究報告について、報告当日の質疑応答を踏まえて、あらためてイタリア語でまとめ、論文の体裁に整えた(雑誌論文)。第4巻第7歌は、恋愛詩人として生涯を全うできなかったこと、文学的題材としてのキュンティアを放棄した悔恨を表明していると解釈した。この論文は、すでに『西洋古典学研究』第62号(2014)に掲載された「キュンティアの亡霊—プロペルティウス第4巻第7歌」に基づいているが、2015年に刊行された2点の注釈書を踏まえており、あらためて考察を加えた箇所を含んでいる。なお、執筆作業にあたっては、Russo 教授の懇切丁寧な御協力が欠かせなかった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計5件)

Taro Hyuga, “il fantasma di Cinzia: Properzio 4.7”, JASCA (=Japan Studies in Classical Antiquity), Vol. 3, 2017, pp. 103-115. 査読有

日向 太郎, 「Tibullus, 1.9.21-22」, 『フィロロギカ』, Vol. 11, 2016, pp. 62-71. 査読有

日向 太郎, (書評)「Joseph Farrell and Damien P. Nelis, eds., *Augustan Poetry and the Roman Republic*, Oxford UP 2013」, 『西洋古典学研究』, Vol. 64, 2016, pp. 137-139. 査読無

日向 太郎, 「古代修辞学におけるエクフラシス」, 『日本英文学会第87回大会 Proceedings』, Vol.87, 2015, pp. 55-56. 査読無

日向 太郎, 「Carmina descripti—ウエルギリウス『牧歌』第5歌について—」, 『言語・情報・テキスト』(東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻研究紀要) Vol.21, 2014, 43-56. 査読無

#### 〔学会発表〕(計2件)

日向 太郎, 「蜜蜂の再生術について」, 地中海学会第39回大会, 2015年6月20日, 北海道大学(北海道・札幌市)

日向 太郎, 「古代修辞学におけるエクフラシス」, 日本英文学会第87回大会, 2015年5月23日, 立正大学(東京都・品川区)

#### 〔図書〕(計1件)

(翻訳書)パウルス・ディアコヌス著、日向 太郎訳、知泉書館、『ランゴバルドの歴史』, 2016, pp. xxxi+269.

#### 〔産業財産権〕

#### ○出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### ○取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

日向 太郎(園田 太郎)(HYUGA (SONODA), Taro)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：40572904

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4)研究協力者

( )